

# チャム人の失われた呪術書をめぐって\*

## —カンボジアのマイノリティ・ムスリムの現在—

大 川 玲 子

### はじめに：カンボジアのムスリム研究

筆者は 2013 年度に在外研究の機会を得て、カンボジアの少数民族でチャム人と呼ばれるムスリム（イスラーム教徒）を調査研究した。研究拠点は、首都プノンペンにある DC-Cam（Documentation Center of Cambodia）であった。この研究所はポル・ポト時代（クメール・ルージュ時代）の文書などの収集や調査を中心に、当時特に迫害の対象となったチャム人への聞き取り調査も行っている。カンボジアでの筆者の調査が可能となったのは、DC-Cam のバックアップのおかげである。感謝申し上げたい。（DC-Cam は現在 Sleuk Rith Institute に組織が移行されつつある。）

2013 年度前半は、ポル・ポト時代のチャム人のイスラーム知識のあり方に焦点をあてた。これが可能となったのは、ある関係者から紙がボロボロになったイスラーム文献（主にアラビア語）を借り受けることができたためである。これは、クメール・ルージュに破棄されることをおそれて、チャム人が土に埋めて隠した書籍の束であり、調査分析することで当時のチャム人がイスラームに関して何を学んでいたのかを明らかにした（Okawa 2013a, 2013b, 2014）。

そして本稿は、主に 2013 年度後半に行ったチャム人の呪術師への聞き取り調査に基づくものである。呪術師を調査研究の対象とした理由はこうである。そもそもイスラームにおいて呪術は批判の対象であるにもかかわらず、仏教社会であるカンボジアのマジョリティのクメール人（一般的に言うカンボジア人）の間でチャム人は恐ろしい呪術を用いるとみなされ、忌避されていることに気付いたためである。しかも状況はさらに複雑で、チャム人はクメール人に忌避されているにも関わらず、呪術師の依頼者の大半はクメール人で、なかには政府高官もいるなど密かに強く支持されている。さらに呪術師たちは、同じチャム人の公的なイスラーム指導者や教養層に属する人々によって批判されてもいる。

このようにカンボジアというムスリムがマイノリティの社会では、イスラーム（教徒）への認識が共同体の外部でも内部でも錯綜しているという現象が見られる。内部での見解の相違はムスリムがマジョリティである他のイスラーム諸国でも見られる。しかし外部からの複雑な視線と絡み合っている状況は独特なものであり、この点がカンボジアのマイノリティ・ムスリムを理解する鍵になるのではない



写真 1

プノンペン北方のチャム人集落に住む呪術師が、家庭の不和に悩む女性に胡椒を用いてまじないをしている。

かと考えられたのである。

そうして筆者が聞き取り調査を始めてみると、呪術師のなかで密かに伝えられている「失われた呪術書」について徐々に知ることになった。そしてさらに調査を進めると、この書はチャム人の現在を象徴するような存在だと思えるようになってきた。本研究では、この書物をめぐる言説を読みとき、チャム人のアイデンティティがグローバリゼーションという現実社会の影響を受けて、変容しつつあることを指摘していきたい。

## 1. チャム人の歴史・文化的背景

カンボジアのチャム人はもともと海洋民族で、現在のベトナムの海岸地域にチャムパ王国を築き、交易によって繁栄した。2世紀には中国の文献で「林邑」と呼ばれて記録され、1835年にベトナムによって滅ぼされた。ベトナムの南進によって15世紀からチャムパの人々のディアスポラが始まり、主にカンボジアに逃げたが、ベトナムに残った者や中国の海南島に逃げた者もいる。

カンボジアに移住したチャム人はコミュニティを作り、クメール人社会に居住したが、「チャムパ王国の末裔であるムスリム」としてのアイデンティティは保持し続けた。波尔・ポト時代にはクメール人でないという理由でジェノサイドの対象となり、その生存率が23%という研究結果もあるほど過酷な迫害を受けた。波尔・ポト時代の後、現在に至るまで、チャム人共同体は復興の途上にあり、モスクやイスラーム学校が急激に増えている。人口はカンボジア全体の2.4-5.2%（2008年のデータ、32万-70万人）と言われる。

だが小さな共同体であるにも関わらず、アイデンティティの重点の置き方は一様ではない。自らを「チャム人」ととらえてチャムパ王国の末裔であると認識する者もいれば、「クメール・イスラーム」ととらえてカンボジア人であることを強調する者、「ムスリム」ととらえてグローバルなイスラーム圏に属することを自己認識の基盤とする者もいる。

## 2. チャム人の現状

さらにチャム人はいくつかの集団に分かれている。カンボジアで「チャム人」と言えば、広い意味で「ムスリム」を意味し、そのなかには三つの集団がある。最大集団（75%）は狭義で「チャム人」とされる集団で、チャム語を話し、イスラームの実践に関しては一日五回の礼拝を行うなど、国外のスナ派と変わらない。「イマーム・サン」は5%ほどの少数派でチャム語を話す。金曜日にしか礼拝をしないなど独自の儀礼をもつ。さらに「チュヴィエ」が20%ほどを占めるが、チャム語を話さずクメール語を用い、出自はチャムパ王国ではなく、ジャワ島などマレー圏と言われる。これら三集団は、カンボジア全体で見ると居住地域に偏りはあるが、都会であるプノンペンでは混住している。

その生活は概して貧しく、土地を持たないため、農業以外の漁業や行商などに従事することが多いとされてきた。使用言語は前述したように集団による違いに加え、高齢者のなかにはチャム語しか使えない者もまだいるなど世代差もあるが、ほぼ皆、公用語のカンボジア語を話す。中高年の知識人はジャウィ語（古いマレー語）を理解し、若い者はイスラーム学校でアラビア語を学ぶという傾向が見られる。このように生活の形態や習慣が異なり、さらに前述したように呪術を

用いるとおそれられているため、チャム人はクメール社会から疎外される傾向にある。それを解決しようとシアヌーク国王は「クメール・イスラーム」という呼称を作り、チャム人をクメールの枠内に含めようとしたが、チャム人の間ではこの名称を認めることには賛否があり、そのアイデンティティのあり方のゆらぎが見てとれる。

### 3. 呪術師の活動

筆者は在外研究中に呪術師 40 人ほどに半構造化手法による聞き取り調査を行った。本稿は、そのなかでプノンペンに在住する 32 名についての分析である（表 1）。呪術師は「クルー」と呼ばれ、これはサンスクリット語「グル」を起源とし、「師」「先生」といった意味である。他方、「呪術」は「イルム」と呼ばれ、これはアラビア語の「知識」「学問」を意味する言葉である。このようにチャム人呪術師の世界観のなかにはインドから大きな影響を受けたチャムパ王国とアラブ起源のイスラームの影響の両方が含まれている。

人 \ 年代	30	40	50	60	70	80	計
男性	-	5	3	7	4	2	21
女性	2	2	3	1	3	-	11
計	2	7	6	8	7	2	32
%	28		44		28		100%

表 1 プノンペンで聞き取りをした呪術師の男女・年齢構成

呪術師に依頼する者たちは、すでに述べたように大半がクメール人で、かつ女性が多い。とは言え、チャム人や外国人からの依頼もあるという。主な相談内容は次のように大別でき、相談者が現実的な問題の解決を求めていることが分かる。(1) 男女問題（浮気、結婚、離婚など）、(2) 商売（店を開く時期、客を増やす方法など）、(3) 他人からかけられた呪術を解く（悪いことが起こると、それはジンやシャイターンの呪いによると考えられる。ジンは「妖鬼」、シャイターンは「悪魔」の意味で、どちらもアラビア語がそのまま用いられている。）、(4) 病気（「病院で見放されても呪術師のもとでは治る」としばしば言われる）、(5) 子どもの問題（体調不良や親の言うことをきかない、など）、(6) 占い（大半の呪術師は、未来を見るための占いはしないと主張するが、密かに行う者もいる）。

興味深い点は、これらの問題に対して呪術師のおこなう「術」で、それぞれの呪術師の依拠する「イルム」によって異なり、大きくチャムパ系、イスラーム系、そしてクメール系（カンボジア系）の三つに分類することができる。（呪術師によっては複数の要素を混ぜている者もあり、完全に分けられない場合もあるが、主に基づく要素がどれかは特定できる。）例えばチャムパ系の呪術は、「カッカ」と呼ばれるチャムパ文字を用い、イスラーム系呪術は聖典クルアーン（コーラン）の句やアラビア文字で書かれた文献を用いる。クメール系の場合は、カンボジアの伝統

的な薬草を用いた民間医療を行う。

このようにチャム人の呪術師は起源が異なる三種の術に基づいており、これは彼（女）たちの呪術師としてのアイデンティティを反映していると考えられる。つまり現在のチャム人呪術師たちの呪術上のアイデンティティは、チャムパ、イスラーム、クメールの三要素に分かれていることが見てとれるのである。

#### 4. 呪術師は「反イスラーム」か否か？

とは言え、彼（女）たちはそもそもムスリムであるというアイデンティティをもっている。しかもすでに述べたように、イスラームは公式見解として呪術を否定している。チャム人のイスラーム指導者や教養層の人々に聞き取りをしたところ、彼らは呪術を反イスラームだとし、「アッラーのみが物事を知り、人間の行為を決められる」と呪術師の能力を否定することが多かった。さらには「呪術師たちは地獄に落ちるだろう」とまで批判する者までいた。

するとこの矛盾を呪術師たちはどのように整理しているのだろうか。その見解を尋ねると、「クルアーンを用いているのでイスラーム上、認められる」という回答が最も多かった。クルアーンの名のもとに呪術の非イスラーム性を封じ込めようとする発想に基づくのであろう。また「人助けや良いことのためだけに行っているので問題はない」という答えも多く聞かれ、意図が正しければ呪術を行って良いとする意識が存在することが分かる。

これに対応して、「ジンやシャイターンを用いた呪術は認められない」という見解も少なくなかった。ムスリムには、ジンやシャイターンは他人に害を与えようとする悪意に基づいた呪術の手先となるという共通理解がある。そのような悪しき存在を用いていないと主張する呪術師たちは、そうすることで、自分たちの呪術は良いものだとして自己弁護しようとしているのである。

このように呪術師たちの大半は、自分たちがやっていることはイスラームには反しないと考えている。実際のところ「実は呪術師をやめたいが、依頼者が来る、または自分の生活のために断れない」という者もいたが、少数派であった。呪術師たちは概して貧しく、教育も十分でない者が多い。留学や国内の教育施設でイスラームの知識を得る機会を持たず、チャム人共同体内の伝統的な知識に基づいて行動している。

#### 5. 呪術書をめぐって

こういった状況のなか、呪術師に聞き取り調査をする過程で、今はもう失われた、古い呪術書の存在が徐々に明らかになっていった。この書は『キターブ・イルム＝アル・ファラク』や『キターブ・トムロク（またはチュルブロク）』と呼ばれる。『キターブ・イルム＝アル・ファラク』は明らかにアラビア語で、「占星術の書」を意味する。『キターブ・トムロク（またはチュルブロク）』は「キターブ」がアラビア語の「書」であることは分かるが、「トムロク（またはチュルブロク）」が何を意味するのか多くの呪術師に尋ねたが、誰も答えられなかった。（筆者は「イルム＝アル・ファラク」が略され訛って「トムロクまたはチュルブロク」となり、元の意味が忘れられているのではないかと推測している。）以下、この呪術書を『キターブ』と表記する。

呪術師のなかで『キターブ』のことを知る者は多くなかった。女性に多いのだが、正式に師に

つかず独学で呪術を学んだ者の大半は知らなかった。知っている者は、家族（祖父や父）も呪術師で、そこから学んだ者に多い。だが『キターブ』について見聞きしたことがあると主張する者たちの間でも、そのイメージは一致せず、曖昧なものであった。例えば、元はチャムパから来た書物だがアラビア語に訳され、文字のみが書かれた、A4 サイズ程度で 20 ページほどの薄い本とする者がいた。これに対して、この呪術書はチャンパの言葉であるカッカで書かれ、図像が多くあり、それを自分の祖父が描き写したとする絵を見せてくれた呪術師もいた（写真 2）。このように詳細には違いはあるが、この書がチャンパ起源であるということは呪術師たちに共通する認識であった。

筆者が写真 2 の布を見せてくれた呪術師に、その祖父が絵を描き写した理由を尋ねると、こう答えた。祖父は能力の高い呪術師で、ポル・ポト時代の前にチャム人の迫害を予知し、『キターブ』が失われることをおそれてあらかじめ布に描きとり、隠しておいた。そして実際に『キターブ』はクメール・ルージュのチャム人迫害のなかで破棄され失われた、と。

さらに呪術師たちに『キターブ』の内容に関して聞き取りをすると、多くの者たちが「未来を知るための学問」で「ジンやシャイターンに関わる」と述べた。具体的には、月星の動きや人体のホクロの位置を見て占う方法が書かれ、それはアッラーのみが知りえるはずの死期や未来を知るための術であり、ジンやシャイターンに命じてなされるという。呪術師たちの多くは、この『キターブ』の内容についてこのように述べた後、これはイスラームに反する「シルク」であり、自分は学んでいない、と付け加えた。「シルク」とはアラビア語で「多神崇拜」を意味し、アッラー以外のものを信じることを指すが、ここでは呪術やジン、シャイターンに頼ることを言っている。このように、『キターブ』は反イスラーム的存在だという認識は共通して見られた。

ここである呪術師からの『キターブ』に関する具体的な聞き取り例を記しておきたい。



写真 2

布に描かれた図像。これはベトナムからカンボジアに逃亡中のチャム人が乗った船だという。

その本のことは聞いたことはあるが内容は知らない。

〔呪術師だった〕父からも教わっていない。未来のことや体中のホクロを知ったりするための良くない知識で、反イスラームだ。実はベトナムにいた〔呪術師だった〕おじが、この本を持っていたので政府に投獄された。マレー政府やベトナム政府はこの本を禁じている。未来を知ることになる危険なものだからだ。そしておじはこの本を処分した。おじは 25 年間ほど投獄され、今は釈放されている。このようなことがあるので、昔の世代の人たちは下の世代にこの本の知識を伝えようとしなかった。

この呪術師の聞き取りから、呪術書『キターブ』がベトナムのチャム人のなかにも存在したとされていることが分かる。筆者は、ベトナムのメコン川沿いにあり、チャム人が多く居住するチャウドックという町を調査で訪れたこと

がある。この町のある呪術師は「警察が呪術師の仕事を禁じている」と述べ、聞き取り調査中、警察をおそれてかなり神経質になっていた。(カンボジアの呪術師たちにはこのような様子は見られなかった。)「イルム・アル＝ファラク」のことを聞くと、「未来について知るための知識で、自分の〔呪術師だった〕父親は知っていたが、亡くなったので教えてもらっていない。この学問は『シルク』で危険なので、私自身は父の死後もあえて学ぼうとはしなかった」と述べた。前述のカンボジアの呪術師とこのベトナムの呪術師からの聞き取りを合わせると、呪術書『キターブ』がかつてベトナムにも存在したことがうかがえ、そのチャムバ起源を示唆しているかのようである。

残念ながら『キターブ』の現物は、筆者が調査した範囲では見つけられなかった。呪術師たちに現存しない理由を尋ねたところ、その回答は呪術師によって異なり、「ボル・ポト時代に失われたため」と「チャム人（のイスラーム指導者）が破棄したため」という二つの説明のどちらかが返ってきた。前者は、ボル・ポト時代にチャム人への迫害のなかで意図に反して失われてしまったということである。また後者は、この書が反イスラーム的であるため、ボル・ポト時代の後、チャム人自らが意図的に破棄したということである。なかには「自分がかつて持っていたが、反イスラーム的内容なので、自ら破棄した」と述べる呪術師もあり、これは後者に属す。

実際のところ、書が何冊あったのかも分からず、それらがどうなったのか知ることはいできない。だが、呪術師たちへの聞き取りから、『キターブ』は反イスラーム的な書物であり、もう存在しないのはやむを得ないと考えていることがうかがえた。

### おわりに：「失われた呪術書」とチャム人のアイデンティティ

このように呪術書『キターブ』はチャム人共同体から失われ、曖昧なイメージのみが残存している。本稿では、チャム人呪術師が依拠するものとして、チャムバ系呪術、イスラーム系呪術、クメール系呪術の三つがあることを指摘した。『キターブ』喪失は、この三つのなかでチャムバ系呪術が時代を経て希薄化していることを意味していると言えるだろう。そしてこのことは、チャム人共同体のアイデンティティの変化と密接に関係していると考えられる。

チャム人共同体はボル・ポト時代の大迫害の後、カンボジアのマジョリティであるクメール人社会との関わりを増やしつつある。同時に、伝統的に関係の深かったマレーシア以外にも世界のグローバル化のなかでクウェートやサウディ・アラビアといったアラブ・イスラーム諸国からの援助や影響を多く受けるようになっていく。ゆえに現在のチャム人は、チャムバ王国に由来するチャム人であるという伝統的なアイデンティティを強く保持することが難しくなり、むしろカンボジア人やムスリムであるというアイデンティティを意識することが多くなってきている。そして呪術師たちもこの影響を受け、チャムバ系呪術の象徴である『キターブ』を時代のなかで封印することをよしとしたのである。

筆者は、この状況がチャム人共同体の今後を示唆するものであり、恐らくさらにチャムバ性は失われていくであろうと考えている。カンボジアのなかでも特に貧しいチャム人たちは生活のために収入の良い仕事や援助が必要であるため、マジョリティ社会や国外の裕福なムスリムとの関わりをさらに増やしていくであろう。しかし、ベトナムでかつて栄えたチャムバ王国の末裔であ

ることは誇りではあれ、今の生活を改善することには直結しない。呪術書『キターブ』の喪失は、このようなチャム人のアイデンティティの変化を背景として生じたと理解することができるのである。

### <主要参考文献>

- American Institutes for Research. 2008. "Assessing Marginalization of Cham Muslim. Communities in Cambodia," (Report for EQUIP1, USAID). [<http://www.citawebdesign.com/Kapes/Site/images/book/pdf/Cham%20Study.pdf>.]
- Collins, William. 1996. "The Chams of Cambodia," in *Interdisciplinary Research on Ethnic Groups in Cambodia* (Phnom Penh: Center for Advanced Study): 15-108.
- Eng, Kok-Thay. 2013. "From the Khmer Rouge to Hambali: Cham Identities in a Global Age," PhD Thesis, Rutgers, the State University of New Jersey.
- Kiernan, Ben. 1998. "Orphans of Genocide: the Cham Muslims of Kampuchea under Pol Pot," *Bulletin of Concerned Asian Scholars* 20: 2-33.
- Okawa, Reiko Kuromiya. 2013a. "Islamic Literature was Buried in the Pol Pot Regime," *Reaksmei Kampuchea*, 2013. 10. 23. [カンボジア語]
- Okawa, Reiko Kuromiya. 2013b. "Hidden Islamic Literature in Cambodia: The Cham in the Pol Pot Period," *Searching for the Truth* (Special English Edition, Third Quarter): 20-22.
- Okawa, Reiko. 2014. "Hidden Islamic Literature in a Cambodian Village: The Cham in the Khmer Rouge Period," *International & Regional Studies* (『国際学研究』) 45: 1-20.
- Ovesen, Jan and Trankell, Ing-Britt. 2010. *Cambodians and their Doctors: A Medical Anthropology of Colonial and Post-Colonial Cambodia*, Copenhagen: NIAS Press.
- So, Farina. 2011. *The Hijab of Cambodia: Memories of Cham Muslim Women after the Khmer Rouge*, Phnom Penh: Documentation Center of Cambodia.
- Taylor, Philip. 2007. *Cham Muslims of the Mekong Delta: Place and Mobility in the Cosmopolitan Periphery*, Copenhagen: NIAS Press.
- Ysa, Osman. 2002. *Oukoubah: Genocide Justice for the Cham Muslims under Democratic Kampuchea*, Phnom Penh: Documentation Center of Cambodia.
- 樋口英夫『風景のない国・チャムバ王国 遺された末裔を追って』平河出版社、1995。
- 桃木至朗・樋口英夫・重枝豊『チャムバ 歴史・末裔・建築』めこん、1999。

\* 本稿は、明治学院大学国際学部附属研究所の2014年度第1回フォーラム（2014年5月14日）での発表をまとめたものである。また本研究は、JSPS 科研費 26370069 の助成を受けている。